

2018 年 7 月 29 日（日）「一つの軛」

マタイ 19:1-12（その 1）

1 イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。2 すると、大ぜいの群衆がついて来たので、そこで彼らをいやされた。

3 パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」4 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、5 『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。6 それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

7 彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」8 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。9 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

10 弟子たちはイエスに言った。「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです。」11 しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができるのです。12 というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」

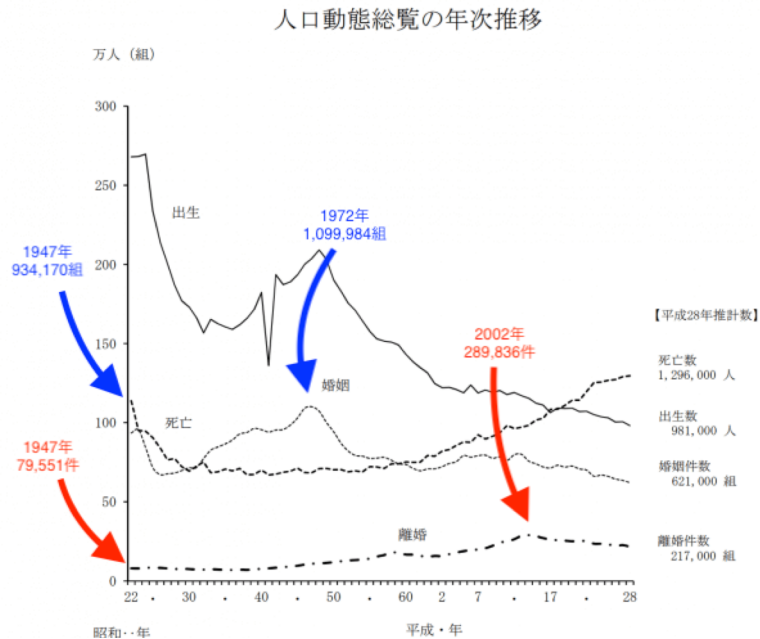
【序論】

今日は「結婚と離婚」というテーマを扱います。これは私たち人類にとって大変生活に根ざした問題ではないでしょうか。人間以外の動物も雌雄が結びつき、交尾をし、子を産み、子育てをし、群れをなしますが、「契約的」あるいは「法的」結婚観をもつ男女の結びつきは人間だけでしょう。そして、おそらく離婚をするのも人間だけです。

厚生労働省が出している戦後日本の『人口動態総覧の年次推移』によりますと、1947年の婚姻件数は934,170件。それから増減を経て、1972年には最高値である1,099,984件（約20万件増加）。それから徐々に減衰し、2011年には661,899件（40万件以上の減少）。その後、更に減少して現在に至ります。

それに対し、離婚件数は 1947 年には 79,551 件ですが、徐々に増加して 2002 年には最高値の 289,836 件に達します（20 万件の増加）。それからやや減衰し、現在に至ります。

以上のような統計を見ますと、日本の婚姻率の低下



に対する離婚率の上昇というのは、民族存続の危機を思わせます。ですが、現在確かに離婚率が上がってきているとはいえ、明治期の日本は今よりはるかに離婚が多かったようなのです。湯沢雍彦『明治の結婚 明治の離婚 家庭内ジェンダーの原点』（角川選書）によると、1960 年代に比べて明治期の離婚率は 3 倍に近かったようで（p. 7）、考えられる理由として以下のことが挙げられています。（p. 63-64）

- ・ 庶民の意識の根底に、結婚は生涯続けなければならないもの、との認識が乏しかった。
- ・ 直系家族制の伝統から、夫婦どちらかの親との同居は当然とされ、八割以上をしめていた嫁入り結婚では、親とくに姑が早期に嫁の欠点を指摘して、離婚を迫ることが多かった。
- ・ 本人たちに問題や意思がなくても、親族や近隣の人々が、その家族のまとまりにふさわしくない、あるいは乱したと認めた場合には、容易に離婚が行われた。
- ・ 離婚の手続きがきわめてルーズであって、なんらの届出を必要としない所が多かった。

その後、明治 31 年に施行された「明治民法」により、25 歳未満だと事実上親の同意なしには離婚できなくなったことにより、離婚件数は大幅に減少しました（p. 142）。言わば「法的な拘束」によって多くの離婚が差し止められたわけですが、これは残念ながら結婚の本質を捉え直した結果ではありません。現代日本において特に必要なことは、聖書が教える結婚の真理を宣べ伝え、実践されることではないでしょうか。

【本論】

本論 1. 本書の新しい展開

さて、マタイ福音書 19 章に入りました。ここから本書の新しい場面に入ります。舞台はいよいよガリラヤからエルサレムに移り、十字架に向けての歩みが本格化します。

イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行

かれた。すると、大ぜいの群衆がついて来たので、そこで彼らをいやされた。(19:1-2)

「この話を終えると」というのは、マタイ福音書の区切りとなる独特の表現で (7:28、11:1、13:53、26:1)、物語が新しい場面に入ったことを示します。「去る」(μετῆγεν) という言葉には「脱皮する」「分離する」という意味があり、これまでのガリラヤ宣教とは一線を画す展開になることが予想されます。

「ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方」という表現は地理的説明としてはしっくりきません。地図をご覧くださいと分かりますように、「ユダヤ」というのはガリラヤから南下すれば行けるわけで、わざわざヨルダン川を渡らなくてもよいのです。ですが、後に一行が「エリコ」という地を通ることから考えて (マルコ 10:46-52)、一旦「ペレヤ」という地に入り、そこからもう一度ヨルダン川を渡って、エリコを経由してエルサレムに入っていくのだと思われます。

この移動の道中にも多くの群衆が従い、癒しを求めてきたようです。



本論 2. パリサイ人の問い

パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、

妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」(19:3)

癒しを求める人々とは対照的に、敵意をもって近づいてくる人々がいました。モーセ律法と、それにまつわる伝承を守ることに命をかけるパリサイ人です。彼らは主イエスに離婚の是非を問うてきます。「試みて」とありますように、ここには「イエスを罵に掛けてやろう」という彼らの悪意が見られる。どういう返答であったとしても、イエスが

何らかの窮地に追いやられるように、考え抜かれた問いなのです。

当時、ユダヤ社会では離婚が当然に行なわれていました。しかも、それは夫側からの一方的な言い渡しであることが多かった。そして、律法の中には確かに離婚の際の手続きの方法が明文化されていましたから（申命記 24:1-4）、今更パリサイ人が主イエスに問うようなものではなかったのです。また、主イエスは既に 5:31-32 においても、ご自身の離婚に関する考え方を明確に示しておられましたから、何度も問うものでもありません。つまり、これはパリサイ人の罠なのです。彼らの意図は、どうにかしてイエスに対する民衆の人気を損なわせたいということ、また律法規定に反することを述べさせ、「律法冒瀆者」として訴える口実を生み出すことでした。

彼らが言っている「何か理由があれば」という表現に注目しましょう。当時のユダヤ社会においては、離婚の条件となる事柄について、大きく二つの解釈がありました。申命記 24:1 の「人が妻をめとり夫となり、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなり、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ…」の中の「何か恥ずべき事」をどう捉えるかによって、離婚の条件が厳しくも緩くもなったのです。厳格な立場に立つシャンマイ学派は、「恥ずべき事」を「婚姻上の不貞」と捉えました。ですから、妻が誰かと性的関係を持ったことが発覚した場合のみ、離婚は成立すると考えたのです。それに対し、ヒルレル学派は妻が夫の気に入らないことを行なったなら、離婚することを夫側に認めました。それは、料理中に食べ物を焦がしたといった些細な理由でさえ含まれます。まさに男尊女卑の社会です。

シャンマイ学派は言う。『妻に何か恥ずべきことを発見したため』（申命記24:1）と言われているので、夫は妻に淫らな行為を発見したときだけ妻を離縁すべきである。しかし、ヒルレル学派は言う。『妻に何か恥ずべきことを発見したため』と言われている以上、たとえ彼女が料理を腐らせても妻を離別できる。ラビ・アキバは言う。『彼女が彼の気に入らなくなった場合には』（申命記24:1）と言われているので、たとえ彼が彼女よりもっと美しい女を見つけた場合でも、離縁できる。（ギッティーン9:10）

当時のユダヤ社会では、ヒルレル学派の考えに同調する傾向がありました。あくまでも男性優位な社会常識が蔓延り、妻は下手に失敗を犯すこともできない立場にあったのです。

現代の日本はここまでひどい現状ではないかも知れません。1970 年代初頭に米国や日本で起きたウーマンリブ運動（女性解放運動）を経て、女性の社会進出が進む今、男女の関係は平等を通り越しているケースも見られます。ただ、過去には男尊女卑の著しい時代があったわけで、今はその反動としての離婚率上昇と言えるのかも知れません。

本論 3. 結婚の本義

主イエスは彼らの問いには直接お答えにならず、創世記 1 章、2 章に描かれている「神の結婚観」、結婚の本来の意味を教えていけます。

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」(19:4-6)

パリサイ人が論じようとしていることと、主イエスが教えておられることとの間には、根本的な次元の違いがあります。パリサイ人はモーセ律法で離婚が認められているというものを基盤に話しているのですが、主イエスはモーセ律法以前の原初の神の目的について語っておられるのです。次回学ぶことになりますが、申命記 24 章における離婚状の規定とは、家から追い出される立場の弱い女性を守るための法律であって、神が積極的に離婚を認めているというものではありません。命令ではなく譲歩なのです。

主イエスがここで引用しておられるのは、創世記 2:24 の聖句です。人類最初の結婚が、墮落前のアダムとエバであったとしますと、この二人が出会い、結ばれたことは、罪なき男女の歪みなき一致を意味したのです。完全な精神的、性的、人格的一致がそこにはあった。互いに愛し合うということにおいて、何の努力も必要なく、当然のこととしてパーフェクトに相手を受け入れることができたのです。「ふたりは一体となる」とは、直訳すると「一つの肉」であり、夫婦の性的交わりは両者の一体性を象徴しています。創世記によると、アダムとエバの出会い、自分の意志で探し回ったものではなく、神によって引き合わされたものとされています。神は敢えて色々な動物をアダムの前に連れてきて、それらとは一つになれないことを認識させた上で、最後にエバを連れて来られた。そして、アダムはエバを見て歓喜しました。

このことは、人間一人一人の結婚にも同様の意味合いがあることを表しているでしょう。この世界でただ一人、結ばれるべき相手が神によって備えられる。そして、一度結ばれた関係は、両者は二人で一つとなったわけですから、二度と切ることはできない。これが、神が人類に与えた結婚の本来の目的なのです。つまり、創造主である神、結婚を創造された神にとって、本来離婚という事柄自体が存在しなかった。では、いつから離婚、あるいは一夫多妻ということが起き始めたかという、それは人類が罪を持つようになってからなのです。創世記 3 章に見られるアダムとエバの墮落の記事は、二人が互いの裸を隠すようになったという象徴的な行動によって、相互の関係の断裂を表しています。罪は男女の一致をあらゆる面で引き裂いたのです。

聖書的結婚観という基盤を持たない日本人は、自分の内に罪があり、その結果としてあらゆる人間関係の断絶が起きるという認識がほとんどないため、離婚も一つの過程のように捉えているかも知れません。そして、現実にはたくさんの悲しい出来事が起きています。教会の門を叩かれる方の中にも、傷を受けて神の許に来られる方がおられて当然なのです。では、教会はどのように傷を受けて来られた方に対して何ができるか。それは、神の元来の御心をお伝えすることであり、罪の赦しの福音を語り、心の慰めを祈り求めることではないでしょうか。そして、現在夫婦の関係があるならば、それを神の御心に基づいて大切にしていけることができるように、それまでとはまったく違う視点で結婚を見ていくということではないでしょうか。

【結論】

6 節にある「神が結び合わせたもの」という部分を「神が一つの軛につないだもの」と訳している人もいます（高橋）。実際、ここで使われている「συνέζευξεν」という言葉は「一つの軛につなぐ」を意味します。つまり、夫婦というのは、二頭の牛を一つの軛につないで、一緒に同じ方向を向いて、同じ速度で歩ませるように、神が二人の人間を結び合わせた関係を言うのです。この軛は壊すことができず、神の証印が押されています。そして、結婚というものがクリスチャンだけに与えられた恵みではなく、人類全体に与えられている一般恩寵であるならば、誰もがこの真理を知って、結婚を通して創造主なる神を崇めるようになることが求められているはずです。教会には色々な経緯を経て来られた方が集っています。そのような私たちに、この新しい、否、最古の神の御心が提示されていることを知り、共に御名を崇めたいと思うのです。

【祈り】

人を男と女とに造り給うた神よ。あなたが人に契約的結婚を与えてくださったことは、何と不思議な御旨でしょうか。人は本来、男女の結びつきを通して、神ご自身の愛を証すべき存在でした。しかし、罪は両者の関係を引き裂き、世界には多くの悲しい現実があります。どうか、聖書の福音に生きさせてください。そして、神の元来の目的に立ち、それを遍く宣べ伝えることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人を男と女とに造り、両者の間に切れることなき関係を結ばせ給うた、父なる神の愛。
結婚の元来の目的を取り戻し、多くの夫婦を三位一体なる神の愛の交わりに招き入れ給う、主イエス・キリストの恵み。

聖書の原点に立ち返らせ、最古の神の目的を遍く世に宣べ伝えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。